

令和3年度 心理臨床相談センター活動報告

(令和3年4月～令和4年3月)

森 裕子 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

山下 美和 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

齋藤 仁美 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

高橋 あゆみ お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

二見 英莉 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

河田 あかり お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

I はじめに

お茶の水女子大学心理臨床相談センター(以下、相談センター)は、主に発達臨床心理学コースの教員と大学院生によって運営されている。本稿では、令和3年度の相談センターの活動実績を簡単に紹介し、今後の展望について述べる。

II 相談センター概要

1. 設備

相談センターは、大学本館の2階と1階に位置する。2階には、受付とカルテや備品などを収めた準備室に加え、個人面接室が2つ、プレイルームと家族面接室がそれぞれ1つある。個人面接室は、背の高いテーブルとイスが設置されている部屋と、背の低いテーブルとソファが設置されている部屋があり、来談するクライアントや用途に合わせて使い分けられている。2階のプレイルームは、箱庭やドールハウス、プラレールなどが豊富におかれ、見立て遊びなど繊細な遊びもできる一方で、バランスボールや大きな積木などもあり、体を使った遊びも行うことができる。プレイルームと家族面接室は、内扉で繋がっており、必要に応じて行き来することができるようになっている。

1階にも、プレイルームと家族面接室が1つづ

つある。1階のプレイルームには、ボールプールがあり、2階のプレイルームより大きな遊びが展開されやすい。また、2階と同じく家族面接室と内扉でつながっている。

2. スタッフ

相談センターのスタッフは、センター員(教員と教務補佐員、アカデミック・アシスタント(AA))、相談員(大学院発達臨床心理学コース博士前期課程と博士後期課程の学生)から成る(表1)。令和3年度より、教員2名が新たに着任し、博士前期課程・後期課程ともに人数が増加し、スタッフが充実した。また、2月より新たな教務補佐員2名、AA1名の計3名も勤務を開始している。

表1 令和3年度相談センター構成員内訳

	人数
博士前期課程院生	26
博士後期課程院生	21
学外協力相談員	0
教員	5
教務補佐員	2
合計	54

Note. 表1内の数値は令和4年2月以前のものである。

新たに申し込みのあったケースは、センター員と相談員でインテークをし、センター員から定期的に臨床指導を受けながら、相談員が中心となってケースを担当していく。また、後述するようにコース全体のカンファレンスにおいても、ケース検討が重ねられている。

III 運営

1. 運営委員会

相談センター管理運営に関する重要事項は、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科附属心理臨床相談センター運営委員会において審議される。それに則り、センター員および相談員(学外含む)は、相談活動に加えて、研究および他の機関との連携を図る。

2. 相談員による運営

相談センターの運営は、センター員と相談員の代表である学生代表や各係の協議・連携によって行われている。学生代表は、博士後期課程の学生が務め、各期のオリエンテーションや振り返りの会の司会、各係のとりまとめなどを行う。係は、

カンファレンスの運営を行うカンファ係、相談室の整備を担当する相談室係、カルテの管理を担当するカルテ係、相談センター紀要の発行を担当する紀要係に分けられ、主に博士前期課程の学生が中心となって活動している。

IV 相談活動

1. 面接形態

相談センターでの面接形態は、インテークを行う受理面接、個人面接や遊戯面接が含まれる臨床心理面接、並行親面接、知能検査などを行う検査面接、家族・グループ面接、コンサルテーションに分けられる。さらに、検査結果などのフィードバックの際には、報告書を作成し、面接に加えて文書料を計上する。以上の面接は従来、クライアントが相談センターに来談し、セラピストと対面して行われていたが、新型コロナウイルスの感染拡大に際し、令和2年度より zoom を用いたオンライン面接も行われている。オンライン面接については、後ほど詳しく述べる。

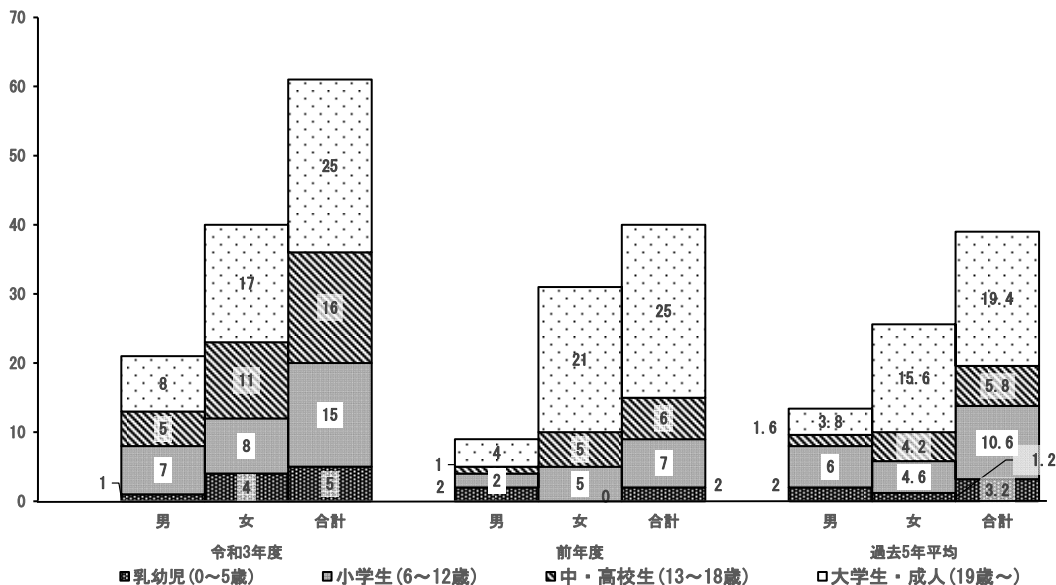


図1 令和3年度、前年度、過去5年平均の新規受案件数

2. 新規受理件数

令和3年度の新規受理件数は61件であった。新規受理件数を、年齢段階と性別ごとに表2、図1に示す。

令和3年度の新規受理件数は、昨年度や過去5年平均と比較し、大きく増加していることが分かる。これは、新型コロナウイルスの影響が続く中でも、安全に開室できるよう工夫を重ね、相談活動を継続できたことや、他機関との連携が進み、紹介されるケースが増加していることなどが考えられる(図2)。

年齢段階や性別の傾向でみると、大きな変化はみられず、大学生・成人(19歳～)の女性来談者が多くなっている。

表2 令和3年度新規受理分年齢・男女別内訳

	男	女	合計
乳幼児(0～5歳)	1	4	5
小学生(6～12歳)	7	8	15
中・高校生(13～18歳)	5	11	16
大学生・成人(19歳～)	8	17	25
合計	21	40	61

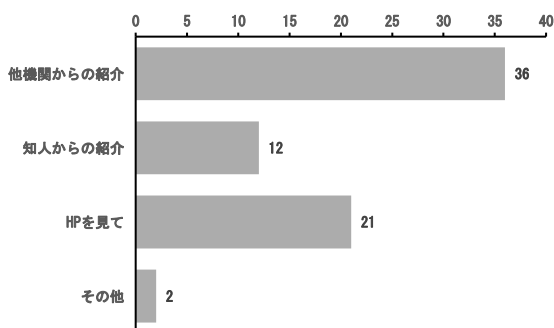


図2 令和3年度新規受理件数来談経路

相談センターでは、昨年度より従来の電話による申込に加え、メールでの申込を開始した。令和3年度新規受理分の申込方法をみると、メールに

よる申込が約半数となっており、より相談を希望される方が相談センターにアクセスしやすくなったと考えられる(図3)。

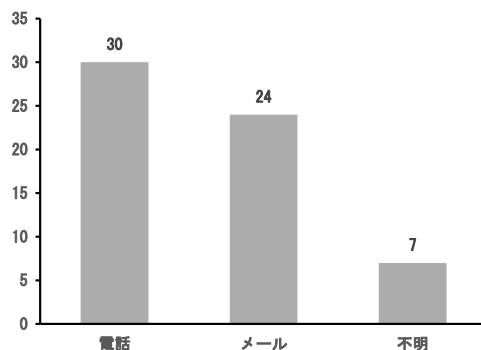


図3 令和3年度新規受理分申込方法

3. 相談件数

次に、昨年度から継続している相談件数について述べる。延べ件数は997件で、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けた昨年度から大きく増加し、過去5年平均を上回る件数となった(表3、図4)。

表3 令和3年度相談件数

	件数	延べ件数
受理面接	61	61 (オンライン11)
並行親面接	24	108 (オンライン28)
臨床心理面接	75	793 (オンライン414)
検査面接	17	19 (オンライン0)
家族・グループ面接	3	3 (オンライン0)
文書料	13	13
コンサルテーション	0	0 (オンライン0)
合計	193	997

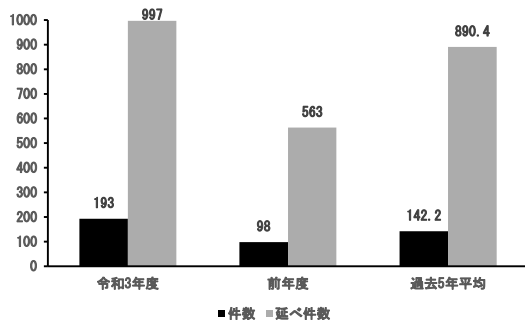


図4 令和3年度、前年度、過去5年平均の相談件数

オンライン面接は、全体で453件となっており、延べ件数全体の約45%を占める。これは、オンライン面接が開始された昨年度（延べ件数全体の約41%）とほぼ同じ水準である。

また、各月ごとにみると、オンライン面接は毎月約40件実施されており、緊急事態宣言やまん延防止措置の影響は小さいと考えられる。受理面接からオンライン面接で実施されているケースもあり、オンライン面接でも対面での面接と同じように安定してケースを継続できていると考えられる。

4. 相談内容

令和3年度の年齢ごとの相談内容について、表4に示す。

6～12歳、13～18歳では学校関係の悩みが多くなり、19歳以上では性格や対人関係の悩みが多くなる傾向にあり、相談内容については前年度以前から大きな変化はみられなかった。

V ケースカンファレンス

センターでは、原則として、毎週水曜日の午後にはケースカンファレンスを開催している。カンファレンスは全員で行う「全体会」と、「分科会」に分けられる。特に「分科会」は、令和3年度以前は2つのグループで実施していたが、令和3年度後期より3グループに分け実施することとした。これは、博士前期課程の学生の増加に伴い、カン

表4 令和3年度内容内訳

	学校・教育関係	発達の遅れ・偏り	性格・行動関係	対人関係	子育てについて	その他	合計
0～5歳	0	4	1	0	2	0	7
6～12歳	14	7	5	0	1	0	27
13～18歳	14	2	5	6	0	3	30
19歳以上	0	5	23	22	3	10	63
合計	28	18	34	28	6	13	127

ファレンス参加者が増加したことや、少人数での意見交換の方が多くの学生が発言しやすいため、より少人数での実施が望ましいのではないかという意見があげられたためである。これらのカンファレンスをとおし、相談員は活発な意見交換を行い、ケースへの理解を深めている。

また、10月には外部講師を招いての研修会も開催した。IPI 統合的心理療法研究所の平木 典子先生にお越しいただき、アサーション・トレーニングについてご講演いただいた。ご講演を通して、自他尊重の自己表現について学び、理解を深めた。

さらに、7月と1月には半期に一度振り返りの会を開き、センター運営の手順の確認と情報管理の徹底、受理ケースと処遇についての報告を行っている。

VI 令和3年度の活動

令和3年度より開始した新たな活動として、次の3つがあげられる。

1. おもちゃプロジェクト

令和3年度後期に、教員からの提案で、相談室係と有志の相談員8名から構成される「おもちゃ

プロジェクト」が立ち上げられた。これまで、相談室及びプレイルームの管理・維持は主に相談員各人に任されており、古いおもちゃや壊れたものも散見される状態にあった。その背景には、クライン派のプレイセラピーにおける考え方が少し誤解された形で受け継がれ、壊れていても修理せずにおもちゃを残していたという経緯があったと考えられる。しかし、令和3年度に学内実習のあり方を見直していく中で、プレイセラピーにおけるおもちゃの意味をセンター全体で再確認し、壊れているもの・あまりに古いものは新しいものへ交換するのが適切という共通認識を持ち、今回のおもちゃプロジェクトを実施する運びとなった。

プロジェクトの具体的な活動内容としては、おもちゃの買い替えに際し、12月までに各相談員におもちゃの確認作業ならびに Google Forms にてアンケートへの回答をお願いし、その結果をもとに年末から年明けにかけて有志で購入・設置作業を行うという流れで実施した。おもちゃプロジェクト内では、相談員からの回答を自由に閲覧・追記できるよう、Google drive と LINE グループを使用し、担当者の決定や購入品の選定を行い、スムーズに作業を進めることができた。交換するおもちゃに加え、新たに設置したいもの、耐震グッズ、観葉植物（受付、233、234）についても検討した。

さらに、年度末には相談室・プレイルームの大掃除を実施した。全相談員が参加し、2～3時間かけ、日頃の清掃で行き届いていなかった部分についても入念に清掃を行い、おもちゃのケアも行った。相談員全員で一緒に掃除をしたことで、学年を超えた縦の繋がりも含め、相談員同士の絆が強くなったように感じ、相談室への愛着が湧いたという感想も複数聞かれた。また、今年度に入り、相談室係からの発案で博士前期課程1年生の相談室・プレイルーム見学会を初めて行った。その際も、「清潔感が感じられた」「使ってみたくなるようなおもちゃがあった」という感想が聞かれた。

今後も相談室係が中心となり、相談室・プレイルームをより良い空間にしていけるよう、努力していきたい。

2. あまなつ茶あむ

今年度より、自閉スペクトラム症（ASD）のある女の子とその保護者を対象とした親子支援プログラムである「あまなつ茶あむ」が開始された。「あまなつ茶あむ」という名前は、「あ」：あそぶ、「ま」：まなぶ、「な」：なごむ、「つ」：つながるの頭文字に、お茶大の「茶」と「魅力」「素敵なもの」「お守り」という意味の「チャーム charm」をかけた“茶あむ”をつなげたものである。令和3年度の冬に第1クールを実施し、令和4年度は院生スタッフ7名、教員2名の計9名で活動を行う予定である。

女性は、思春期以降に第二次的性徴に伴う心身の変化を経験し、その後の発達段階においてもさまざまな「からだ」に関する課題と向き合わなければならない。特にASDのある女の子は、それらの課題に困難を抱えやすいことが知られている。そこで、思春期以前から予防的にアプローチすることで、思春期以降に想定される困難に適切に対処し、その後の心身の安定を支えることにつながる（砂川・山田、2021）と考えられる。

本プログラムは、ASDのある女の子の思春期に関連するテーマについて、「こころ」と「からだ」からのアプローチを行い、知識を学ぶだけではなく、実際にからだを動かしながら、楽しく学ぶことを目的としている。そして女の子たちが、自分のこころとからだや、自分自身を素敵なものだと感じられることを目指す。また本プログラムでは、大学院生に対して実践的なトレーニングを行うことも目的としており、それ等の活動を通じてグループ支援プログラムの開発やその効果の検証を行う実践研究を行うことも目指している。

本プログラムの内容は、1回90分×1クール6～8セッションが基本となり、1セッションの中

に知識を学ぶ講座とからだを動かす講座を設定している。第1回クールでは、新型コロナウイルスの感染状況等から、グループではなく個別・オンラインで全4回での実施となった。そのため、インターネットの通信状況によるラグや、実際に接することができないもどかしさなどもあった。一方で、個別セッションだからこそでできる参加者の特性に合わせたプログラムの実施や、時間的負担の軽減、参加者やスタッフの表情が見えやすいことなど、個別・オンラインセッションの利点や可能性も感じる事ができた。

今後も、参加者を募集するための広報活動や、実践研究としての活動にも力を入れながら、何より ASD のある女の子とその保護者の方のグループ支援としてより良い活動ができるように、実践と検討を重ねていく。

3. 受付実習

令和3年度から学内実習プログラムの一環として、心理受付対応実習(以下「受付実習」とする)が始まった。本実習の目的は、電話やメールでの相談申込への対応を通じて、短時間でのクライアントのニーズの的確な把握とその記録、守秘義務を含む職業倫理および法的義務への理解、危機介入の在り方を学ぶことであり、博士前期課程1年次の後期から実習を開始する。具体的な実習内容は、相談センターへの来談に関する申し込みの電話に対して、ニーズを聞き取り、迅速に記録としてまとめ、センター員に報告し、受理会議にかけるための資料を作成することである。緊急を要する連絡があり、かつ、判断が困難な事例の場合には、教員または教務補佐員に直ちに連絡することとしている。

こうした受付実習では、慣れない電話対応に戸惑ったという声や、相談センターがどのように運営されているのかに興味を持つきっかけとなった、受理面接前に必要な情報がわかるようになった、クライアントの話を端的に聞く力がついた等の感

想があげられている。

VII まとめと今後の展望

以上、令和3年度の相談センターの相談実績や、活動について振り返った。令和3年度は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けた昨年度と比較すると、相談件数が増加していた。そのため、相談員が多くのケースに触れ、臨床経験を重ね、貴重な学びを得ることができていると考えられる。

また、おもちゃプロジェクトやあまなつ茶あむなど、新たな取り組みも開始され、相談員によるより主体的なセンターの運営や、これまでほとんど行われていなかったグループ形態の面接の増加などが期待される。

さらに、令和2年度よりはじまったオンライン面接が、令和3年度でも引き続き多くのケースで実施されていることも確認できた。オンライン面接は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い実施されるようになったが、令和3年度では感染者の増減に関わらず、毎月一定の割合で実施されていることがうかがえる。対面での面接と同じように、オンライン面接には一定のニーズがあると考えられることから、コロナ禍の収束以降も実施を継続することを含め、オンライン面接の可能性や意義を検討していくことが今後の課題である。

最後に、本活動報告における従来の様式からの変更点について述べる。以前までの活動報告は、ケース数等について客観的に報告する統計資料のような意味合いが強かった。今回の活動報告から、より多くの情報を掲載し、相談員の実際の活動について詳しく報告することを目指した。これは、相談センターの運営や令和3年度のケース全体について多角的な視点から考察するとともに、学生主体の運営という相談センターの特徴をより明らかにするためである。特に後者の学生主体の運営という点については、従来の活動報告ではあまり強調されてこなかった。また、振り返りの会はあ

るものの、1年間の学生による運営活動の記録を残し、相談員のあいだで広く共有する手段が乏しかった。活動報告に学生による運営についての記述を含めることで、1年間の学生運営の記録を残し、次年度以降の運営の一助になるのではないかと考える。来年度以降も、学生運営の記録も含めた活動報告が行われることを期待する。

<謝辞>作成にあたりご協力いただきました、AA 小松実知子さんに厚く御礼申し上げます。

文献

砂川 芽吹・山田 美穂 (2021) . 自閉スペクトラム症のある女の子の親子グループプログラムの開発: 立ち上げまでの経緯 お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, 23, 11-22.